

第16回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第一六回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで三六〇名という多くの方にご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十一月三日、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

現代詩賞の授賞式は、残念ながらコロナウィルス流行の勢下中止させていただきます。賞状・賞品・賞金などは明年一月下旬までに直接受賞者に発送させていただきます。

第一七回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。お待ちしております。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

第16回「文芸思潮」現代詩賞

最優秀賞

「デジタルトランスフォーメーション」
「液晶の窓」「AI」

柏原 宥 (埼玉県川越市)



優秀賞

「母の骨」「夜を泳ぐ」「最期の日」

茉莉えま (岩手県盛岡市)

「十一面観音―聖林寺」「火炎土器」

「花の眠り」 清水一美 (東京都立川市)

「業火」「裂孔」「青味泥」

薬師丸怜央 (茨城県取手市)

「星下」「循環」「グレーゾーン」

白神つや (埼玉県さいたま市)

「0527」「らふランチ」『定例会議事録』

洛田二十日 (東京都江戸川区)

「やさしいいきもの」「ネオの詩」

「死別」 シーレ布施 (兵庫県西宮市)

「余熱」「分かち」「Routine」

中村郁恵 (北海道札幌市)

奨励賞

「花をひらく」「失楽園」「春夏秋冬」一橋省吾 (埼玉県さいたま市)

「禍」「獣」「金平糖」

麻生ゆり (神奈川県綾瀬市)

「蒼ざめた夏」「山桜/2020」「茜色」遠藤芳子 (東京都狛江市)

「亡骸」「微睡」「星夜」

十路田道広 (福岡県福岡市)

「ピリオドの奏楽」「さくら雨」「桃」石井春香 (大阪府高槻市)

「稜歌」「渡悔」「夏韻」

井上珠希 (千葉県市川市)

「晚餐の風景」「窓辺のアユカ」佐々木蒼馬 (東京都世田谷区)

「禍」「ショートカット・キイ」「みたくもない夢」

タダノヒト (神奈川県川崎市)

「かいな」「のたうつ」

潮江しおり (滋賀県大津市)

「拜啓の手前で」「遊戯の喧騒」「すべての遠い微動するもの」

柄摩くべる (千葉県木更津市)

選評

詩の余白、詩の言葉

松尾真由美

詩を書き続けていると体感的にわかってくるものがある。この賞には長年にわたって応募してくる方もおられるので、わざわざ言うまでもないことかもしれないが、詩にとっての余白の重要性は看過すべきことではない。ただセンテンスが変わるから行替えするということではなく、書かないことを語らせる、そうした効果も余白にはあり、余白があるからこそ言葉から言葉へのつながりを飛翔させることもできる。また視覚的なことでいえば、どう余白を見せるかという造形的嗜好も加わってくることもある。散文詩であっても四隅の余白をどう作るかを作者は考える。一行何文字にすればどれくらい余白ができるかは練れた詩人ならば想定済みであるだろう。一篇の詩においての余白の重みを、書き手も読み手も忘れてはならないし、造形的観点からもイメージを追求するという作業にしても、詩作品は美術と無関係ではありえない。

括られてもいる。歌というものも詩に加えられることを鑑みれば、言語芸術という大仰な物言いはせずとも、詩には音楽的要素も美術的要素も入っていることは事実としてある。こうしたもろもろの要素が絡み合って、言葉によって言葉を越え出るものたちを表現しようとするのが詩作といえる。初心者の方にはわからないところもあるだろうが、詩について、こうした考えがあることを頭の片隅にでも置いてほしい。

講評に入る。当選作の柏原宥「液晶の窓」はシステムエンジニアならではの危機意識が創出される。コンピュータは便利なものだが、人の能力を超えていく力が社会の構造さえ変えてしまうという危機を、言葉を省略することで説明することなく訴える。この事象は世界中を覆う大きな問題であろう。「距離 時間 質量」と淡々と言葉を置くことで重みがでるのは、余白の力と言いたいことの力の均衡がとれているためだ。数字もまた魅力的に詩に溶けこんでいる。バランスが良く、専門性を独自の個性として詩に生かす好例ともいえるものだが、詩として大人しい印象も受けるので、この先はもっと専門用語（読者がわからなくてもよい）を入れこんで、それに対応するように詩の言葉を躍らせていくことも方法の一つかと思う。

優秀賞の中村郁恵「Routine」もこの作者独自の個性が際立っている。実用性のあるものから観念を引き出し、身

そして、この余白に応じるのは詩の言葉しかない。余白に造形があるのなら、当然詩の言葉も造形という観点が否応なく関わる。だから、構築という表現も詩言語には使われる。同時に作られる余白と言葉。もちろん、言葉が先になるのだが、余白の呼吸と言葉の呼吸が一体となったとき、詩における作者の内部世界が動き始め、こうした余白を持つ詩の言葉で作られる内部世界は常識的な外部世界とは違っていく。だから、詩の言葉のありようも作者それぞれ独自のものを生み出していい。詩は怖ろしく自由であるのだ。詩の中で「誰が、いつ、どこで、何をしたか」を説明することもなく、山本陽子のように言葉自体を壊すことも可能となる。物語詩もあるが、散文をこなしつつ詩的感興を呼び起こすには相当な技術がいる。思ったことを書くだけならば日記ですまされるだろう。詩の発端は日常からくる実感だとしても、詩の言葉はその先を探っていく行為である。

言葉を繰り出す行為が本人の意図から外れて、意識下のものを掘り出していく行為こそ詩の言葉の自由というものだが、ここには内的リズムによって言葉を運動させていくという音楽的要素も加わっていく。なだらかだったり滑らかだったりする心地よい言葉の流れは、ある種のフリーズとして読み手の心を揺さぶるし、発語や発話という呼吸の感覚は作者の身体と直結する。自由詩も詩歌という分野で

近なものとの触感を詩的世界で膨らませる。何を書いているかわからないという感想もあるが、むしろ詩の言葉も使わず、表現も柔らかく、味読に耐えられる詩作品といえよう。ぱっと読んでわかる作品は詩の面白みに欠ける。発想や発見が詩にとって大事であって、「吊るされているきみ」が箒のようなものだとして、このような展開を迎えるルーティーンは素敵だ。繰り返せざる得ないものの手応えが詩によって輝いている。

優秀賞の白神つや「循環」は言葉の流れが非常に良く、言葉を繰り出すことで先の世界を作り出すことに成功していると思われる。親と子の血のつながりを「僕らの身体に住んでいる父と母」と表わすことでの発見があり、「僕が発生したときにあなたたちから奪った多くの」という発想も新鮮で、作者独自の視点が素直にめぐっていく感覚が天体ともつながっていく。括弧内の言葉はなくていい。括弧をつけることで説明的な言葉を入れこんでしまっているところが惜しかった。

優秀賞の清水一美「十一面観音―聖林寺」は書きたいものが定まっている作者の落ち着きの中で、厳かなものへの畏怖が言葉の端正さを生み出して、詩を書くことで世俗の芥を浄化していく様態が、詩を読みすすむ読者にも移ってくる。清浄なものが清浄そのままの風景へと転換され、光があってもどこもなく闇の底で安らぐ感触が好ましく思

われた。

優秀賞のシーレ布施「ネオの詩」はネオと僕の物語が爽やかに語られる。ネオとは新しいとか近代とかの意味合いも含まれるが、響きだけでも心地よい。森林の風景も独特に表現され、二人を囲む異空間が少しずつ動いていく様子も、二人の想念の動きと一体化して、行くことと行かないことの相克を何気なく描いている。目の痛みが若さの中の一つの傷として印象深く、終わりの会話も詩的な余韻を残して成功している。

優秀賞の薬師丸怜央「業火」は「ボッボツ」という擬音が効果的に使われて、作品自体の激しさを膨らませている。摂氏300度の灼熱とは原爆のことだと思うが、その阿鼻叫喚の切迫感とはしかに作品を覆っていて、カタカナ表記も漢字表記も地獄を描くための必然だったろう。そうした説得力がこの作品にはある。ただ、小指や親指という細部が出てくることの違和と、「群衆」と「おまえ」が出てくることで視点にぶれを感じさせる。指やおまえを取った方が大きな災厄を大きいままに表現できる。



松尾真由美

まつお まゆみ

詩集『燭花』（思潮社）
詩集『密約—オブリガート』（思潮社）第52回H氏賞受賞
詩集『揺籃期—メッサ・ヴォーチェ』（思潮社）
詩集『彩管譜—コンチェルティーノ』（思潮社）
詩集『睡濫』（思潮社）
詩集『不完全協和音 consonanza inperfetto』（思潮社）
詩集『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊のはるかな記憶を』（思潮社）
BOX詩集個展用パンフレット詩集『装飾期、箱の中のひろやかな物語を』
現代詩文庫『松尾真由美詩集』（思潮社）
アンソロジー『現代詩最前線』（北溟社）
『小野十三郎を読む』（思潮社）
『短篇集 夜』（驢馬出版）
『ふるさと文学さんぽ 北海道』（大和書房）
詩集『花章—ディヴェルティメント』（思潮社）
詩集『雫たちのパヴァーヌ』（アジア文化社）
詩集『多重露光』（思潮社）
北海道新聞文学賞（詩部門）選考委員



松尾真由美 詩集『雫たちのパヴァーヌ』
アジア文化社刊 送料別 1760円（税込）

佳作

「純化」「父、母、僕の涙」「お父さんの言葉を思う」

吉井 裕

「自分を愛するために」「初雪二〇二〇に」「幸福な時間」

千葉チエンス

「ロックダウンポエトリー」「ロックダウンポエトリーII」

天ヶ谷麗

「カナヘビ」「クリスタルアイランド」「聖なる絵画」

栗山貴之

「枯渇下線SE」「憤怒*炎舞」

岩尾宏紀

「静脈」「夏は死んだ」「inside」

つづかかない

「三月一日から僕らはスーツを着るようになった」

「主観を想う存在だけ残ってれば世界は安泰」

「たばこを吸いたいがそれだけは最後の意地としてな

んとか我慢している」

渡辺八登

「磔」「宵街幻燈」「帰宅」

青木聡汰

「New Moon」「祝婚歌」「夜光虫或いは満界の星」

隅田聖美

「鋼」「鴨川」

インバ

「春眠（一）」「春眠（二）」「春眠（三）」「小山修」

「世界が終わる日に」「木下駄」

「遠いところのちいさな家々」

田中知織

「心の飛驒に羽を休めて」

西條由美子

「長男への同化」「小径」

佐藤 裕

「めだか鉢」「手触り」「足跡を拾う、小瓶を解く」

小川茉莉

「雨上がり」「遺棄」

氏家 忍

「幸福ゆき」「まらい光」

宇川榛太

「最後の駅（旅立ち）つきささった月」「すきま」「坂道」

北原 満

「自殺」「猫よ」「マントラ」

三島佑太

「一枚のチケット」「ダビデ像」「樹海」

岩崎 明

「ユカリ」「シガマ」「メルツ」

今井 悠

「人工冬」「石の男」

三ッ木健

「ある被爆者の証言」

星椎水精

「静謐な雨のために」「殲滅RIOT」「あの角を曲がれば」

篠崎フクシ

「哀しむこと」「カレライス」「カラス」

坂井 傑

「窓辺」「手紙」「モクレン」

橘いずみ

「夕微光」

土山育司

「罪」「夢」「生存」

東風佳子

「いじめ」「学び匣」「未遂」

そらごつつむぎ

「魔獣の朝の歌」「sunroom」「虹の入り江」

浅見龍之介

「適齢期」「合掌」

井川水穂

「こぼれ落ちる悲しみから」「明日への勇気を抱き締めて」

三浦恵子

佳作

- 「終息」[nyx]「黎明」 南斗るい
「霧遊病」 夏灯冬扇
「脳髓に息づいている」 「狐が窪の土手に咲く」
「真夏日」 「ちいさな世界」 「こども部屋」 惟村来帆
「綾織る星のうた」 朝霧橙子
「閉じる」 「ねじれの沈黙」 「ステファン・ボルツマンの恋」 鳥居さち
「母の錯乱」 「あの日のこと 今のこと」 清水達也
「んげんについて」 「おいろかいぎ」 「これからのあんた」 ふじたこうらこ
「神様あのね」 「粉雪の降る頃」 「飛んで消えてく願ひ事」 夏目知佳
「3分間」 「君に話したいことがある」 「エトスによろしく」 黒須奏帆
「光の支配」 木塚康成
「蚕蛾のお姫様」 「形而上の供物と形而下の廃墟」 山内裕史
「躍動と鼓動と可動」 満島芍薬
「暗室」 「わたしの…教育勸語」 「つれづれに生まれた子ら」 阿賀の狐 山河に生きる「漁師ブルー」長谷川航
「たぶんあのとき」 「美について」 「代弁」 山口たおず
- 「わたしとわたしの魂の速度」 「僕達の再生について」 星野瑞紀
「未来」 小林
「末日」 「光は東」 「空の死に場所」 秋山祥吾
「信心」 「箱の中」 「完結の朝」 菊池優人
「伝わる、伝える」 「必要な言葉」 「言葉」 ポール・ザレー
「営巣される記憶とたわむ覚醒」 「鳶に絡まれた黙約」 「あの日とその後の間で」 「愛を知るひと」 紺野 詩
「空に抱かれたら」 紺野 詩
「マザー・ドーナツ・マザー」 「青い血はアンダーライン」 サカイ遠雷
「ずっとそばに FROM TOKYO」 江野沢成二
「紅葉の牢獄」 眺あさこ
「ピアスホール」 「みつばち」 深雪 朔
「蒼い桜」 「コーヒーカップ」 「Dramatic Life」 「遙かなる夏」 楓悠
「待ちぼうけ」 「岬の誘い」 「惜別」 中原賢治
「見限られた生」 七 まどか
「2020年春」 「鼻」 「獣の目」 鹿島楓
「潜伏芽」 「動くことができない」 絹本ゆい子
「巨樹と孤独と自由とわたし」 白山ワンダフル
「退屈凌ぎ」 「星」 安堂
「分かれ道」 「血脈」

コンピューター世界への危惧

五十嵐 勉

第一六回現代詩賞は、優秀賞レベルが多く出、昨年よりこの層は豊饒だったが、突出したものはなく、最優秀賞を選ぶのに難航した。私としては、柏原宥氏、清水一美氏、茉莉えま氏、薬師丸怜央氏の四人の中から、合わせて一本形式で二人を選ぶのも一法かと思っ望んだが、まず清水一美氏が、これまで何度も当選している作品レベルからあまり上がっていないことから外された。残る三つの中から二つをどうかとなったとき、松尾氏から薬師丸氏と茉莉氏について、異議が唱えられた。さらに、二つを当選にするより、一つに絞った方がよい、という主張に従い、結局柏原宥氏の、コンピューター世界への危惧を鋭く表した作品が最優秀賞に輝いた。

柏原氏は、以前同じ題材で、優秀賞を受賞しており、その作品と比べて、今回は抽象世界の異常な拡大とそれへの人間の依存の危惧がいつそう深められている。その点を評価した。巷にあまたある詩作品のなかで、この抽象世界への危惧を扱ったものは希有で、忍び寄る記号支配の未来を見据えた眼差しは、意味があると思った。文芸作品そのものでさえ、コンピューターが産み出す時代である。創造の

領域さえ侵してくるこの危うさをしつかり見据え、巨大な陥穽のありかを探る意志は重視しなければならない。好むと好まざるとにかかわらず、コンピューターによる支配は進んでいく。その警告としての柏原氏の「デジタルトランスフォーメーション」と「液晶の窓」は、重要である。氏には、ここに留まらず、もっとこの世界の危うさと、その裏面に拡大する人間性の喪失を暴き、剔出してほしい。祝意を送ると同時に切望したい。

優秀賞の茉莉えま氏の「母の骨」は読み応えのある作品で、現在のプラスティックで空疎な生活を「骨」という原点に遡って呪詛し、やり場のない希求を、母性に求める痛切さは、深く響いてくる。母性に叫びを投げるしかない追い詰められた現実が、肉声として確かに届いてくる。それは「殺して」という言葉によって、命を切り結ぶ真剣の立ち合いにまで到達している。叫びの強さにおいて、最優秀賞でもよかったが、部分的に生硬な言葉が残存している点で、もう一度見させてもらう機会を経たうえにしたい気持ちも残った。先回以来成長著しいことも評価した。

薬師丸怜央氏の「業火」は、力強い剣舞のような趣が感じられ、「ボツ」「没」という効果音を仏教的な無常観に乗せて生への怒りを歌い上げている作品で、託す思いはよく伝わってきた。他の二作品よりも、この「業火」は特に結晶度が高く、収斂性が高く感じられた。もともと高い技術

は持っているが、技巧に溺れず、「思い」の深さを詩の根底に置いていくことを大事にしていけば、さらにスケール大きく開花しそうな気配がある。期待したい。

清水一美氏については、古典的な拡張を備えた詩の言葉は、相変わらずさすがと思わせるものの、同じ所に留まっている感じで、もう一つ発展性が乏しい。悠久な時間軸を浮かび上がらせ、その上に仏像の昔の時代における希求と落ち着きを蘇らせているが、高踏的な立場が、現代への響きを薄くしている。悪く言えば現代を遮断することによって高さと純粹さを得ている孤立がある。宿命といえ言えば宿命だが、ここに留まってさらなる深さを求めていくか、打開して新境地を開くか、一つの岐路に立っているとも言える。

優秀賞、白神つや氏の「星下」は、柔らかな流れが快い

入選

- 「ノウツにふける、おんなだつ」 「チホウ現代シソウ」 永島慎太郎
「令和元年八月十一日、山の日」
「とんでゆけ、ちいさな鳥よ」 「熟れずの生」 「星とともに」 小岩れい
「文学という明かりを追い続けた男」 細川明人
「僕らの感覚」 「人間の尊厳」 吉岡幸一
「蜜柑」 「車窓」 「命じる信号機」

- 「はじめに」 「あなたへ」 「海」 平岡 花
「新型コロナ戦争」 「縄張り」 「生贄の空」 諸井博行
「情景の中に」 「山桜」 「花筏」 葛岡昭男
「後ろ姿は清潔に！」 「心の容」 「このままだまって」
「リアルラブキル」 山名うみ
「国境」 「若きコンドル 私の息子」 「ライオンの眼差し」 松原泰子
「14歳」 池野太樹
「亡き家族」 「ミーが走る」 「泣き虫」 倉沢辰子
「笑笑」 「さかなびと」 七羽鳩子
「むかんせいなひびのこと」 「甲斐性のない朝」 「淘汰」 石丸麻綾
「魚族の血」 「口内炎」 「ふかぶかとねむれ」 やしき灯子
「結婚式」 「翔べ」 「ひと時」 横井純子
「J.S.Bach」 「天上の木」 世樹
「家」 「本棚のひと」 「色の欠片」 佐藤光江
「記憶」 「病む子よ」 樋口英子
「まどろみ」 「救済」 「林檎ジュースの空」 不破 董
「見えないもの」 「この夜さえも」 「還る場所」 創まりの虚数
「何でもない芸術」 「軋む肋骨」 「佳日」 小石川尚
「雨の交差点」 「静かに道は眠っている」
「葬儀を終えた夜の夢」 上木戸晃
「過密地域における音楽の解放」
「羊についての簡易報告」 「五里夢中」 北 堅太

旋律を奏でているが、同時に甘さが良い意味でも悪い意味でも出ているのが、評価が分かれるところだろう。女性だが自分を「ぼく」と言い、「父さん」とも賢く育ちました」と家族離れしていないような表現が、幼さを引き摺っている。それが魅力とも言えるが、その甘えを切り離した上に、この流れのよい旋律を大きく奏でられるようになれば、独自の領域を獲得できるように思う。楽しみではある。

シーレ布施氏はまだ一九歳の若さで、半分憧れの領域に足を突っ込んでいるように見えるのは物足りないが、言葉の飛躍力は大胆で、構想を大きく広げていく力は、翼の翔力を感じさせる。これからの経験によって、言葉への力があるように増していくか、構想がどのように変化していくか、興味を抱かせる。大きく開花して欲しい。

中村郁恵氏は二度目の優秀賞受賞だが、変わった視点と

- 「忘れ物」 「せいくらべ」 「泣くな、ものさしくん」 村上文緒
「また モリへ」 olee
「バベル」 「なかった」 「そして今回も俺たちは変わらない」 夢沢那智
「逢瀬」 「懐かしさと」 「老い二才」 燃ゆる芥
「また、桜の季節」 「片眼のユートピア」 仙波寛人
「クウェイバー・レスト」
「夜の動物園」 「あれは、ぼくです」 「星の舟」 鹿島 遊

- 「変死、あるいは交響曲」 北上郷夏
「Underground」 「不揃いな恋人たち」 「君だけのブルー」 海月
「君は汽車を降り一人荒野を征く」 月夜野風
「ドブ」 「溶解」 「音楽」 森 由紀
「かげろう」 「黒い出目金」 「空の大蛇」 矢土りえ
「闇の踊り子」 「ひと夏」 「少女」 桜道優純
「果ての宇宙で」 「例壺」 昭架
「映写機」 「高炉」 「偽粧」 真論子
「のっぺらぼうの涙」 「ある夕暮れのこと」 いまだまりこ
「なめくじら らんらん」
「ハコの中で生きる」 「街角」 「バス停」 沖田 有
「アルケミストの待つ島へ」 「生きることのつらさと喜び」 高倉麻耶
「優しさ」 當島伊織
「螺旋」 「背徳の愛」 「血は流れる」 月海水雲
「燦然」 「囀りのエチュード」 「真実」 五十月 彩
「土笛を吹く」 「リラの街」 瀬戸成海
「処女航海餞の辞」 「表現の海拔」 「砂詩」 齋藤圭之介
「暗闇は君のためにある」 「あの夏へ」 「浮世離れ」
「三ノ輪浄閑寺」 「鳥類園」 「一分間に」 野上 卓
「介護の魔法」 「one of themの君と僕」 「続く世界は一夏の青」 清水将也
「炎夜」 「浜辺の二人」 「森の小径」 加藤光哉
「飼育」 「時代の貧困」 「あかい夕焼け」 高橋蒼太郎

着眼はユニークで、日常のさりげない空間や時間が一つの詩の世界で異相を持ち始めるのは、氏ならではの世界だろう。ただ、私は日常を異次元へ転化するそれだけでは、物足りなさを感じる。変わっていて、発想は意表を突くが、ではそれ以上のものがそこにあるかどうかと問ひ詰めれば、それ以上のものは見出せない。その点、エッセイなどの方が、氏の内面の深さがより明確に伝わってくる。どちらに比重を置くべきか、そろそろ考えてもいいのではないかと。

洛田二十日氏の「0527『らふランチ』定例会議事録」サラリーマン生活の中での組織の中の会議を詩にしたものだが、詩としては変わっている状況であっても、会議で眠って夢を見ている模様から抜け出してはいない。実際の会議中に書いたということにどこまで価値を置くかと問われれば、それほど大きな意味はないだろう。変わり種としては認められても、本物の詩であるかという点では、疑問は拔けず、むしろこういう状況でないところで書かれた作品を読んでみたい気がする。

奨励賞については、いくつか印象に残ったものを挙げたい。

「禍^{わざわい}」は世界に対する反抗の姿勢を詩の言葉として明確に表現し得ているし、鋭い皮肉は、しっかり刃となつて斬りつけている点は評価するが、ペンネームはいただけない。「タダノヒト」という名前は、名前になっていない。パンチ力

いた。と同時に、「茜色」では、失ったものが彼方の西方浄土で自分との再会を待っているような、壮大な橋にまで思いを膨らませているところに、発展的な回帰を感じた。仏教の極意に通じるイメージに到達を覚えた。

一橋省吾氏は、大きな活字を混ぜたり、行に一字ずつ傾きを加えたり、言葉の一部を赤くしたり、技巧に大胆な工夫を重ねてきて、幅を広げた。また言葉遣いそのものも、リズム感を持って、奏でられていく。これまでから飛躍を遂げたと言っている。「かろみ」を保持しつつ足をしっかりと地につける何か重要なことを会得したようにも思える。これは賞賛していい。

今回は、特に佳作と入選の数が多く、前年の一・五倍近くあった。これはその層が厚くなって、全体のレベルが上がっていることを示している。今まで高い評価を得ていた人たちも、少しぬるくなると、下へ行ってしまうし、中学生や高校生もかなりのレベルのものを書いているので、下から上への突き上げも、盛んになってきている。この中間層の充実と賑わいは、全体としては喜ぶべきことだろう。

この暮き合いから当然同じ佳作にも開きが出てき、奨励賞に極めて近い、いい作品もかなりあった。

岩尾宏紀氏の「枯渇下線SE」は、詩の位相が現実を暴くポジションを得ていて、強引な斬りつけが快くもある。言葉の展開力はかなりのものであるので、めげずに持続して

もあり、せつかくの言語センスを持ちながら、ペンネームが作品を損ねている。言葉の遣い方は、当然ペンネームにも反映されるべきで、こうしたペンネームは詩への姿勢を疑われるだろう。詩の内容は優秀賞レベルでありながら、ペンネームに見られる言葉への粗雑さが足を引く張った。

井上珠希氏は「稜歌」に見られるように、言葉の根に古典の格調を漂わせているところが魅力だが、美の詠嘆に溺れることを終着とする傾きを感じられて、惜しまれる。むしろ「渡悔」のように、力強く疑問を呈していく詩風を大事にしていけることが、飛躍に繋がるだろう。

連続して七回の奨励賞となった麻生ゆり氏の詩は、近年特に彫琢を深くしていて、私は優秀賞のレベルと認めているが、この力を、有無を言わず多数に認めさせるには、ポリウムを大きくして、長い詩に挑んでみることも有効だろう。構成を加えた量感の伴った詩も、その細やかな言葉の綾織をいっそう生かして、より大きな光を放つかもしれない。時間をかけて挑戦して欲しい。

遠藤芳子氏もかなりの回数の奨励賞を重ねていて、毎回読むのを楽しみにしている。当初は、失ったものへの痛切な愛惜が胸を打ち、それが詩の核になっていたが、最近そこから脱却してより普遍的な、より大きな世界への広がりを感じられるようになっていた。今回もその方向にあって、この世界を許す寛大さに希望と救いを得て、翼を滑翔させて

いけば、開花が期待できる。私はこの三作品を評価している。掲載してみたい作品である。

てづかなこ氏は思い切った言葉が小気味よく、断裁力を示していて、魅せられるものがある。ただ、詩がそれぞれ短いので、もう少し量感が欲しい。積み上げる力や流れを盛り上げる力が備われば、もっと普遍性を増す。期待したい切れ味がある。

天ヶ谷麗氏の「ロックダウンポエトリー」は一枚に一つの単語があつたりして、斬新ではあるが、それで胸をグツサリとまでは行っていない、奇を衒うに留まっている。もっと実質的な言葉を紡いで、それ自身を強力にして欲しい。せつかく「ロックダウン」と言う強烈な言葉をタイトルにしているのだから、その大きな事件性を詩の立場から解剖して、露わにしてみたい。お上品な肉料理では、インパクトはない。

栗山貴之氏の「カナヘビ」は視点の鋭さがあって、おもしろかった。カナヘビとビル街との対照が生きている。この鋭さを展開していけば、興味深い詩世界が実現する。次回も読みたいと思った。

「紅葉の牢獄」の江野沢成二氏も紡ぐ力があり、造形力を感じることが、赤と血を結びつけるのに紅葉を用いるのは、やや触媒に欠ける恨みがあった。また最後に繰り返しを置くのは安易で、それによって全体が損なわれたのは惜しまれ

第17回 文芸思潮 現代詩賞 作品募集

文芸思潮では、清新な詩作品を募集します。志操が荒廃し、言葉の真の力が失われつつある現在、日本語の奥底に流れる感情の根を洗い、美しい言葉として表現の結晶体に高める文芸の営為は、今こそ再興されねばなりません。言葉の芯をなす強靱な詩精神を鍛え、人の心の底に響き、永くそこで生き続ける言魂の作品を期待します。

作品募集要項

趣旨●真の言葉の力に溢れた詩作品を賞揚し、詩の創作エネルギーを顕彰する。由来や伝統に根差しつつ、現代に造形する、美しい日本語によって、言語の精神エネルギーの復活をめざす。また埋もれた才能や作品を掘り起こし、広く社会に知らせ、作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルの詩作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人3篇までに限る（3篇の場合まとめて送付のこと／添付別紙は全体に対して1枚のみでよい）。1篇でも2篇でもよい。

応募資格

※恐縮ですが応募審査料1500円を御協力くださいますようお願い申し上げます。郵便為替には無記入・無押印をお願いします。

応募規定

一篇は2000字以内（原稿用紙使用の場合も必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格）。3篇以内。応募審査料全体で1500円を郵便為替などで同封のこと。

ワープロ原稿はA4用紙を罫線なしで横に使い40字×30行で印字。必ず閉じること。別紙に①応募部門（2021年度第17回現代詩賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム・それぞれふりがなを④年齢・生年月日・性別（これらのないものは失格）⑤〒（郵便番号は必ず明記のこと／ないものは失格）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらを厳守しない場合は失格とする。⑨応募審査料1500円を郵便為替などで同封。外国からは14USドル。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取りコピーを送付のこと。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」現代詩賞 係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮現代詩賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名7万円／3名5万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品

選考委員●松尾真由美・五十嵐勉

締切●2021年5月31日（当日消印有効）

発表●予選通過者は2021年9月25日発売の「文芸思潮」81号に発表。

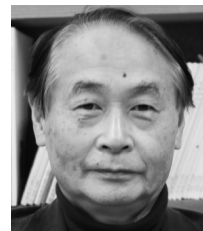
受賞発表・最優秀賞および優秀賞作品掲載は12月25日発売の82号に発表掲載。奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 痛切な心の叫び、天を射抜く鮮烈な言葉、水晶のように輝く言葉の結晶、流麗な音韻の調べ、言魂の響きを期待しています。



第16回「文芸思潮」現代詩賞



五十嵐 勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ

79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞

98「緑の手紙」で読売新聞・NTT プリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞

2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞

他に中篇小説集「ノンチャン、NONGCHAN / ヲットヤン、聖丘寺院へ」長篇「破壊者たち」戯曲「核の信託」など

詩は現実との対話であり、世界と生身で向かい合うことでもある。この世界には、もつと侮蔑し、憎み、呪い、叫びたいことがたくさんある。呪いを深く重ねて初めて祈りに到達するのかもしれない。それほど断罪したい運命が満ちている。この世界が平和で平穏であるはずがない。命という限りあるものの中に閉じ込められているそこにこそ、声を投げて何かにぶつきたい言葉の衝動がある。その弾丸で現実を突き破って欲しい。そこに永遠に通じる精神の華が咲くことを信じている。



現代詩賞選考会風景 2020.11.3 アジア文化社図書室で